

巻頭言

学長 東 隆 眞

私の大学の同窓生にS・Tという和尚がいる。長野県の諏訪市の丁寺という禅寺の住職である。獣医大学を卒業して獣医さんでもある。地域社会の福利のために大いに活躍している畏友である。

S・T君のところに、市内の主婦でK・Yという名の女性がたずねて来た。K・Yさんは、信州大学教育学部の家庭科（被服）の非常勤講師もつとめておられる。それとは別に、ご自分の生涯学習のために放送大学に入学し、その卒業研究ということで、「作務衣^{さむえ}」についての考察を試みたい。ついては、ぜひ、和尚さんのご協力をいただきたいとのことだった。そこで、S・T君は、私が『禅と衣食住』などという著書を出したことがあるのを思い出して、それを紹介しておいたらしい。

やがて、K・Yさんは、『作務衣——そのルーツと魅力——』と題する研究が完了し、放送大学に提出した。同時に、S・T君にも一冊送られてきたのであった。

雑忙にとりまぎれて数年が経過したが、お前のことを想い出したので、研究レポートを送るという手紙を添えて、九〇頁あまりの論文が、

私のところに届けられた。今年のはじめのことである。

さて、作務衣とは、ひとくちでいえば、禅僧の労働服である。上下に分れ、上衣は袖は筒袖、打ち合せ式、下衣はもんぺに似たズボン状が一般的である。材料は、木綿、麻などで、色は黒、茶、ねずみなど。このごろは、禅僧ばかりではなく、広く一般の人たちも家庭でのくつろぎの衣服としてもちいるようになってきているらしい。

この作務衣に関する研究は、私は、従来、ほとんど見かけたことがない。K・Yさんの論文は、はなはだ希少価値がある。

K・Yさんは、作務衣とはなにかという疑問をおこした。仏教伝来のとき法衣とともに伝来したと考えられる。が、形は和服に似ているから、日本の着物であるかもしれない。あるいは、その両方が渾然と入りまじっているとも考えられる。そんな疑問を、まず抱いた。

この推察を手がかりに、まず、作務衣の発祥をさぐる。現在の着用の実態を明らかにする。日本の着物と作務衣との関係について考察を加える。現代日本の衣服の一つとして今後の作務衣のありようを展望する。そのような視点から、ユニークな内容を盛りこんだレポートが

まとめられたわけである。

S・T君は、お前の大学には、生活科や日本文化学科があると聞く。K・Yさんのレポートが、なにかの参考資料になればと願って届けるという。

私は、S・T君の友情に感謝し、まだ面識もないがK・Yさんの御努力に遠く敬意を表するものである。

私は、K・Yさんの研究レポートを生活科長寺田和子先生にご覧いただき、感銘をうけたというご感想をいただいた。うちの短大でも大学でも、「作務衣」の研究は今のところ見当たらない。

「作務衣」に限らず、おおよそ、日本の伝統文化に関する諸問題について、広く一般のかたがたの関心、興味は高まる一方の昨今である。そして、日本の伝統文化といえば、その有力な背景として仏教や禅を想定しないわけにはいかない。のみならず、その仏教や禅は、そもそもきわめて世界性、国際的な性格をそなえている宗教であり、人類の叡知であつたのだ。

K・Yさんのことをご紹介して、これが本学の教師、学生にとって学問的刺激ともなればと念じて、この一文を草した次第である。